「朝鮮通信使」と日韓医学交流

文　慶喆*

‘Chosentusinshi’ and Japan-Korean Medical Interchange

MOON Kyungchol

1　朝鮮通信使と日韓交流

日本と韓国との間には歴史以前からもさまざまな交流が行われて来たと考えられる．高松塚古墳群を始めとする古代の文化交流はもちろん，近代に至るまでの交流の歴史はさまざまな分野において両国間に影響を与えている．そのなかでも大変注目すべき交流が近代における「朝鮮通信使」である．日本と韓国の間に「通信使」という名前は高麗時代から見られるが，本格的な通信使としては「文禄・慶長の役」以降，徳川幕府に派遣した大規模の朝鮮の使節団を指すことが一般的である．近代において日本と韓国の間には不幸な文禄・慶長の役があり，その結果一時的な両国の交流の中断をもたらすことになる．

文禄・慶長の役の後対馬藩主の努力により，1607 年に国交が回復された．最初は文禄・慶長の役の後の国交回復と捕虜送還が目的であったため「回禮使兼刷還使」という名前だった．戦乱の後すぐ国交が回復されたのは，次のような三者の利益が一致したからである．

*　東北文化学園大学総合政策学部准教授

⑴　徳川幕府側

朝鮮通信使が国王の親書を持って来ることによって，国内外に権威を示すことができる．これは将軍の代わりに要請し，朝鮮通信使は襲職祝いのために来日することになる．江戸までの往復の行列は盛大極まり，それを一目見ようと沿道には大勢の人が集まった．幕府にとっては最高のセレモニーで，幕威高揚になるため，膨大な予算が使われたにもかかわらず 200 年間続いたのである．

⑵　朝鮮側

朝鮮側は形式的には，日本側の要請に応じる形で優位性を保つことができる．このことは国交回復の前提条件として，「日本側から朝鮮側へ国交回復要請の正式な国書を送る事」を主張した．中国との「事大外交」に対して，日本とは同等な関係である「交隣」を通した．また，文禄・慶長の役という苦い経験がある朝鮮にとっては日本の内情を伺う機会とした．国内では，中国の「金」の侵略に不安を抱えていた朝鮮は，日本との安定的な関係を望んでいた．朝鮮側は文化の優越性を示すために，最初の一行には一流の文人，学者等も加えた．

⑶　対馬藩側

一番積極的だったのが，対馬藩側だった．財政的には朝鮮に依存するしかない対馬藩にとっては死活にかかわる問題であった．日朝交渉の中心的役割を果たし，朝鮮との貿易も独占しようとする意図があった．宗義智は，徳川幕府に朝鮮との国交回復を嘆願したり，朝鮮への使者を送り誠意を示したりして必死に働いた．このことは後々まで対馬藩の重荷になる．

1607 年の第 1 回目の「丁未使行」から 1811 年第 12 回目の「辛未使行」まで約 200 年間にわたる通信使の招聘名目は次（表 1）のようになる．

以上のように 300 人から 500 人に及ぶ大使節団は，最初の目的である政治・外交的な役割から徐々に文化使節へとその役割が変化していく．その当時，正使，副使，従事官，製述官，訳官等が表 2 のような記録を残している．

この他にも江戸時代の公式外交文書である『通航一覧』，対馬藩の記録である『対馬宗家文書』を始め，尾張の漢詩人木下蘭皐の『客館璀餐集』，佐々木平太夫の『両関唱和集』，水足安直の『航海厭酬録』，林鵞峯編『歴朝来聘』，

表 1　朝鮮通信使の内訳

回	年度	人数	目的
1	1607	467	国交回復兼刷還
2	1617	428	大阪評定回答兼刷還
3	1624	300	徳川家光の襲職祝い
4	1636	475	泰平の祝い
5	1643	462	徳川家綱の誕生祝い
6	1655	488	徳川家綱の襲職祝い
7	1682	475	徳川綱吉の襲職祝い
8	1711	500	徳川家宣の襲職祝い
9	1719	479	徳川吉宗の襲職祝い
10	1748	475	徳川家重の襲職祝い
11	1764	472	徳川家治の襲職祝い
12	1811	336	徳川家斉の襲職祝い[1]

表 2　朝鮮通信使の記録[2]

	著者名	書物		著者名	書物
①	慶暹	『海槎録』	⑪	趙南翼	『扶桑録』
②	吳允謙	『東槎目録』	⑫	金指南	『東槎目録』1682 年一行
③	李景稷	『扶桑錄』	⑬	洪訳士	『東槎録』　1682 年一行
④	姜弘重	『東槎録』	⑭	金顯門	『東槎録』　1711 年一行
⑤	任昱	『日本日記』	⑮	洪致中	『海槎目録』
⑥	金世濂	『海槎録』	⑯	申維漢	『海遊録』　1719 年一行
⑦	黄臯	『東槎録』	⑰	鄭慕裨	『扶桑紀行』1719 年一行
⑧	申濡	『海槎録』	⑱	作者未詳	『日本日記』1748 年一行
⑨	趙絅	『東槎録』	⑲	趙曮	『海槎日記』
⑩	作者未詳	『癸未東槎録』			

草間直方の『籠耳集』などの多くの記録が残っている．本稿ではこのような記録を元にして，とくに朝鮮通信使の使行中の「医事問答」を通して日韓医学交流の実情を探ってみることにする．

2　朝鮮通信使の構成と交流内容

以上で述べたように朝鮮通信使の構成は毎回 300-500 名位になる大規模な

1)　1811 年第 12 回目の通信使は「易地通信」として江戸ではなく，対馬で国書を交換した．これが江戸時代の朝鮮通信使の最後になり，日韓関係は途絶えてしまう．

2)　記録は日記形式等からなっており，その内容は文学，政治，経済，美術，思想，歴史，外交，風俗，制度等多様多枝に及んでいる．

人数であった．通信使一行は漢陽[3]を出発し，釜山まで 2ヵ月，江戸までの往復は 10ヵ月以上もかかった．朝鮮通信使の日程については表 2 などの記録によって詳細が分かるが，1719 年第 9 回目の通信使日程は申維漢の『海遊録』[4]に次のように記録されている．

漢陽〔4 月 11 日出発〕→釜山〔5 月 13 日到着，6 月 20 日日本に向け出発〕[5]→佐須浦〔6 月 20 日夜到着，6 月 23 日出発〕→鰐浦→豊浦→西泊浦→金浦→厳原〔6 月 27 日到着，7 月 19 日出発〕[6]→壱岐→藍島→地島→赤間関〔8 月 18 日到着〕→上関→鎌刈→鞆浦→牛窓→室津→兵庫〔9 月 3 日到着〕→大坂〔9 月 4 日到着，9 月 10 日出発〕[7]→京都→大津→守山→彦根→大垣[8]→名古屋〔9 月 16 日到着〕→岡崎→浜松→駿府→富士山→箱根→小田原→神奈川→品川→江戸〔9 月 27 日到着〕[9]→国書伝達〔10 月 1 日〕→将軍の回答書を受け取る〔10 月 11 日〕→江戸〔10 月 15 日出発〕→釜山〔1 720 年 1 月 7 日到着〕→漢陽〔1 月 24 日到着〕

このように朝鮮通信使の使行は 9ヵ月を超える長旅であった．

朝鮮通信使の構成は，まず正使（1 人），副使（1 人），従事官および書状官（1 人）という三使からなる．その次に製述官，書記，訳官，写字官，画員，医員等で構成される．『増正交隣志』[10]から朝鮮通信使の編成を見ると表 3 のようになる．

以上は『増正交隣志』の例であるが，他の記録である『通文館志』[11]や『春官志』[12]等と比べてみると員役の名前や員数が若干異なる．そのなかには「馬上才」[13]や日光山[14]の「山致祭」のための「読祝官」等のように一時的に必要に応じて参加した役員もある．このような変化は朝鮮通信使の役割と深

---

3)　漢陽は朝鮮の 500 年間の首都で，今のソウルである．

4)　表 2 の⑯で，申維翰は第 8 回目通信使の製述官で参加した．

5)　釜山では物質の調達や準備等があり，第 1 回：24 日，第 2 回：16 日，第 3 回：19 日，第 4 回：32 日，第 5 回：18 日，第 6 回：31 日，第 7 回：24 日，第 8 回：41 日，第 9 回：51 日，第 10 回：不明，第 11 回：46 日，第 12 回：42 日間滞在した．

6)　厳原で対馬藩主と日程や使行に対する協議をした後，対馬藩主が江戸まで案内する．

7)　ここからは陸路を利用するため，朝鮮から来た船や一部の水軍などは大坂に残る．

8)　この道を朝鮮通信使が通ることから「朝鮮人街道」と呼ばれた．

9)　この時の本陣の宿舎は浅草の東本願寺であった．

10)　朝鮮後期に日本などの隣接国家との外交関係を記述した書．1802 年司訳院の訳官であった金健瑞が李恩孝，林瑞茂とともに刊行した．

11)　司訳院の訳官であった金指南とその息子慶門が 1708 年編纂した司訳院の沿革と中国および日本との外交関係を記録した書．朝鮮通信使の記録は 1682 年第 7 回目まである．

表 3　朝鮮通信使の構成

正使	1 人	副使	1 人	従事官	1 人
堂上訳官	3 人	上通事	3 人	製述官	1 人
良医	1 人	次上通事	2 人	押物官	4 人
写字官	2 人	医員	2 人	画員	1 人
子弟軍官	5 人	軍官	12 人	書記	3 人
別破陣	2 人	馬上才	2 人	典楽	2 人
理馬	1 人	熟手	1 人	伴倘	3 人
船将	3 人	卜船将	3 人	陪小童	19 人
奴子	52 人	小通事	10 人	都訓導	3 人
禮単直	1 人	廳直	3 人	盤纏直	3 人
使令	18 人	吹手	18 人	節鉞奉持	4 人
砲手	6 人	刀尺	7 人	沙工	24 人
形名手	2 人	纛手	2 人	月刀手	4 人
巡視旗手	6 人	令旗手	6 人	清道旗手	6 人
三枝槍手	6 人	長槍手	6 人	馬上鼓手	6 人
銅鼓手	6 人	太鼓手	3 人	三穴銃手	3 人
細楽手	3 人	錚手	3 人	風楽手	18 人
屠牛場	1 人	格軍	270 人		

いかかわりがある．今は一般的に朝鮮通信使という名前で使われているが，これは最初からの正式の名称ではない．1607 年の第 1 回目から 1624 年の第 3 回目までの正式名称は「回答使兼刷還使[15)]」であった．その後，朝鮮側の記録では「通信使」あるいは「日本通信使」が見られ，対馬藩の記録では「信使記録」「任戌信使」「天和信使」，幕府の記録では「朝鮮之信使」「朝鮮国信使」「信使」と見られ，「朝鮮通信使」という名称はどこにも出てこない．

朝鮮通信使の派遣目的は，以上で述べたように第 1 回目から第 3 回目までは外交と捕虜送還[16)]が主な目的であった．しかし，第 4 回目以降は政治・外交的な使節から文化使節へとその役割が大きく変化していくことになる．

---

12)　編纂者や編纂年代がよく知られていないが，李孟休 (1713-1751) が編纂したという説がある．朝鮮通信使の記録は 1719 年第 9 回目まである．

13)　「馬上才」は馬の曲芸で，1636 年第 4 回目から 1643 年第 5 回目，1682 年第 7 回目，1711 年第 8 回目，1719 年第 9 回目，1748 年第 10 回目，1764 年第 11 回目の計 7 回登場する．

14)　日光山参拝は 1636 年第 4 回目，1643 年第 5 回目，1655 年第 6 回目にある．

15)　「刷還使」は文禄・慶長の役のとき日本に連れ去られた捕虜を，朝鮮へ連れ帰るのを目的とした使いであった．

16)　捕虜送還は思うように進まなかった．『扶桑録』等の記録を見ると朝鮮で身分の低かった人はほとんどが日本に残ることを希望したという．

朝鮮通信使を通してどのような文化交流があったかは表3で見たように使節の構成と密接なかかわりがある．三使，書記，通訳等外交に必要な人員とそれをサポートする水軍や各役員につく奴子以外に，医員，画員，音楽隊，踊り手，曲馬等の文化人芸術人が多く含まれ，鎖国時代に外国文化に触れる機会が少なかった日本人にとっては外国文化に触れる貴重な機会であり，韓流ブームの嚆矢だとも言われている．朝鮮側もこの機会を通じて高い水準の文化を誇示しようとしてそれぞれの最高の人材を集めた[17]と考えられる．朝鮮通信使による主な文化交流の内容は次のようになる．

⑴　詩文唱和

同じ漢字文化圏であることから通訳を介さずに筆談での情報交換である．両国を代表する文人同士の交流は「林羅山と趙絅」，「雨森芳洲と申維漢」等がある．詩文唱和がどれほど盛んだったかは『通航一覧』百八巻に「その青類冊をなすもの百有数十巻にいたる」と記されている．このように詩文唱和の内容はかなりの出版物として残されている．そのなかでも詩文唱和の白眉は1711年第8回目の使行の時に江戸で行われた「江関筆談」である．11月5日と6日の2日間で繰り広げられたこの筆談の主役は第8回目の通信使の正使として参加した趙泰億と日本側は新井白石であった[18]．この筆談の内容は『江関筆談』として1712年1月下関で編集された[19]．この筆談は江戸だけでなく，各地方においても行われ，その話題も芸術，学問，文学，礼法や制度，日常生活品まで多様な内容に及んでいた．また，場所も江戸，大坂，名古屋等の大都会に限らず牛窓，守山，上関の地方や小さい島である「藍島」でもあった．筆談唱和のなかでも際立っているのが「医事問答」などの医学交流であるが，これは次の第3節で詳しく述べることにする．

⑵　画員絵画交流

朝鮮通信使の構成のなかには必ず「画員」が含まれていた．最初は1人

17)　趙曮の『海槎日記』1763年8月3日条に最高の人材を集めたとの内容が記されている．

18)　この筆談で趙泰億は「朝鮮は朱子学の正しい継承者」であることを主張し，新井白石は大西洋，イタリア，オランダ，琉球等の海外地理や事情の知識で対抗した．

19)　1712年帰国中に天気不良で下関で足止めされ，風本館で任守幹が編纂したとされているが，趙泰億が整理した異本も存在する．

だったが，1643 年第 5 回目から 2 人に増えた．画員は日韓の絵画交流の主役として優れた人材が求められた．これは「能書画之人帯来」と日本からの要請もあった．画員は「図画署」[20]の推薦を受け，教授職が選ばれた．画員の選抜は訪日の経験のある家系や対日訳官の家系から選ばれ持続的な交流を可能にした．画員は日本人の書画請求にも応え，その人気は絶大であった．即座で画いた「客画」や山水画，禅機画等が日本全国に残されている．日韓絵画交流の代表としては，1711 年第 8 回目の趙泰億と祇園南海，1748 年第 10 回目の李聖麟と大岡春ト・江阿弥，1764 年第 11 回目の金有聲と池大雅の交流があげられる．大岡春トは『画史会要』で李聖麟と崔北を高く評価している．朝鮮通信使は日本の画壇に影響を及ぼし，菱川師宣，葛節北斎等は通信使行列を版画で製作し，版画集も刊行している．江戸の狩野や住吉等は「朝鮮御用御屏風」を製作し，朝鮮王に献上することもあり，今にも伝わっている．

⑶　音楽や踊り

朝鮮通信使一行には音楽関係の役員が全体の一割を超える時もあった．人数としては 30 人程度が見られるが，1711 年第 8 回通信使の時には楽団だけでも 51 人に上った．

この楽団を管理するのが「典楽」[21]であり，掌楽院から選ばれた．楽団は宴会や致祭等で演奏し，また関白や藩主の前でも披露した[22]．内部でも

表 4　1711 年第 8 回通信使の時の楽隊構成

喇叭手	6 員	錚手	7 員
螺角手	6 員	鼓手	2 員
太平蕭	6 員	奚琴	2 員
銅羅	4 員	長鼓	2 員
細樂	3 員	笛	2 員
鼓打手	6 員	篳	2 員
三穴銃手	3 員		

20)　朝鮮の図画を担当する官庁で，礼曹所属の従六品であった．

21)　典楽は普通 2 人であったが，1655 年第 6 回目は 3 人，1636 年第 4 回目，1643 年第 5 回目は 6 人も派遣された．他の役員とは違い，薛義立のように第 4，第 5，第 6 回目の 3 回も使行に参加する人もいた．

22)　1711 年第 8 回目の時江戸で関白の前での演奏と 1636 年第 4 回目の時大坂本誓寺で開かれた破陣樂が有名である．

長い長旅で疲れた使行員のためにも演奏した．日本も雅楽を披露したり，朝鮮の楽器に興味を示したりした．日光東照宮の宝物殿には朝鮮通信使が奉納したという朝鮮楽器が展示されている．

朝鮮通信使の楽団を伴う行列は，日本に強烈な印象を与え，津市の「唐人踊りと唐人行列」[23]，鈴鹿市東玉垣町須賀社の「唐人踊り」，牛窓の「唐子踊り」として今にも伝わっている．

⑷　衣服と料理

朝鮮通信使が着ていた華麗な衣服は一般の人に興味をもたらし，服飾においても研究の対象になった．1748 年第 10 回目の時には，関白の命令により「団領」「紗帽」「錦冠」「朝服」「高厚冠」「東坡冠」「笠子」[24]を借りたという記録がある．

文化交流のなかでも現実的で一番活発だったのが食を通した交流である．朝鮮通信使の接待には特別に気を配り，朝食に七五三膳，昼食に五五三膳に三汁，十七菜を出したとされている．また，朝鮮通信使の使行路を中心に往復間宴会が開かれ[25]，これも食文化の交流に大きく貢献した．朝鮮通信使には肉が好まれ，三使の宿舎であった彦根の宗安寺では肉の搬入口として新たに「黒門」[26]まで設けたという．食事は日本側が宿舎や茶屋で提供する「塾供」と道具や材料だけを提供する「下程」があり，下程のために使行には「刀尺（7 人）」と「屠牛匠」という調理人が同行していた．調理を通じて両国の食文化に影響を与えたと考えられる．朝鮮にはこの時「三重饌榼」，「鋤焼き」，「薩摩芋」等が伝わった．

⑸　武芸と「馬上才」

表 3 では軍官が 12 人含まれており，軍官は試験によって選ばれ，関白の前で弓等の武芸を披露した．また軍官は日本の武器や地図等を入手する任務もあった．

「馬上才」が初めて登場するのは 1636 年第 4 回目の時で，対馬藩主の要請があったからである．対馬藩主の国書改作事件の局面を打開するための

23）「唐人行列」は朝鮮通信使の構成が生きている（辛基秀の調査研究）．
24）『奉使日本時見聞録』曺命采，1748 年，6 月 5 日記．
25）往路には赤間関，大坂，京都，名古屋，駿府，復路には赤間関の代わりに牛窓の「五所路宴」であった．
26）「彦根藩井伊家文書」．

計略があった．馬上才は朝鮮武芸 24 種の 1 つで，馬上曲芸であった．最初の公演は対馬藩邸だったが，1711 年第 8 回目の時から田安門内代官町に新しい馬場を作り，「朝鮮馬場」と称した．馬上才は 1 番先に招待される人気振りで，荻生徂徠の漢詩[27]や鳥居清信の「馬上才図」等でもその様子が伺える．馬上才は，1636 年第 4 回目，1643 年第 5 回目，1682 年第 7 回目，1711 年第 8 回目，1719 年第 9 回目，1748 年第 10 回目，1764 年第 11 回目の計 7 回あり，1811 年第 12 回目の時無くなった．

3　朝鮮通信使を通した医学交流

第 2 節では朝鮮通信使の構成と交流内容を探ってみた．朝鮮通信使の派遣目的は，最初は政治的・外交的だったが 1636 年第 4 回目以降は文化交流に中心が移ることになる．その交流のなかでも代表的なのが「絵画」と「医学」の交流であるが，本稿では医学交流を中心に探ってみることにする．

表 3 の構成を見ると医員 2 人とは別に良医 1 人が加わっている．良医は日本側が求め，日韓医学交流の中心として位置づけられた．日本は朝鮮の先進的な医療技術を導入しようとして臨床よりも基礎研究の良医を求めたのである．医学交流は，日韓の医師により唱和筆談で行われ，「医事問答」としてまとめられ刊行されていた．筆談唱和は日韓交流の 1 つの手段として使われ，1853 年に編纂した林復斎の『通航一覧』[28]には“朝鮮通信使が来ると必ず筆談唱和があり，1682 年（第 7 回目），1711 年（第 8 回目）頃から活発化してその本も百数十冊に達する”と書いてある．これは 1682 年（第 7 回目）から良医との医事問答が本格的に始まる時期と重なる．

朝鮮通信使行の医員は，典医監[29]から 1 人，恵民署[30]から 1 人選ばれ，後に加わった良医は特定の部署はなく臨時職ではあったが最高の医師が選ばれた．朝鮮通信使行に良医が登場するのは 1655 年第 6 回目であるが，医事問答に関する記録はもうすでに 1636 年第 4 回目からある．第 4 回目に医員と

27）「麗奴之戯馬の歌」.
28）対外関係史料を国別・年代順に配列した史料集（350 巻）.
29）「典医監」は朝鮮時代宮中に医薬を供給する官庁.
30）「恵民署」は朝鮮時代庶民の病気を無料で治療し，女性に針術を教えていた官庁.

して参加した白士立は徳川幕府の奥医師野間三竹[31]との間に医事問答が行われている．内容は『東医宝鑑』についての意見交換であり，『朝鮮人筆談』[32]として刊行された．場所は江戸か京都であるが，定かではない．その後，良医が加わり日本人医師との活発な議論が行われ，筆談唱和集のほとんどが医事問答[33]である．場所も朝鮮通信使が長期間滞在する江戸を中心に京都（京師），大坂（浪華），名古屋（尾張）のような大都会から場合によっては藍島のような地方にまで広がった．京都，大坂，名古屋の場合は出版活動が活発な地域だったからである．藍島は遠く離れた小さい島であるが，朝鮮通信使行の寄港地であり，天候によっては1ヵ月くらい滞在しなければならない特殊な事情もあった．

この医事問答に対する日本の期待は高かった．朝鮮医学に関する関心のきっかけは何といっても『東医宝鑑』（25巻）という医学書である．朝鮮では医学書の刊行が盛んでその数は200種類にも及んだ．朝鮮医学書は日本にも伝わり，研究する人も多くいた．朝鮮医学書は，文禄・慶長の役の時，宇喜多秀家によって日本にもたらされ，『和剤局方』等54種138冊[34]にもなる．これは朝鮮医学に対する関心の高さの象徴であり，朝鮮医学の集大成といわれる東医宝鑑に及ぶのはいうまでもない．東医宝鑑は東洋医学のなかでも独自の理論を打ちたてた医書で[35]，中国の「北医」や「南医」とは違うという意味で「東医」とした．この本は1613年朝鮮国王の主治医だった許浚によって刊行された．東医宝鑑の骨格は「陰陽五行」である．この医書の評判が広がり，中国や日本でも刊行されることになる．日本での刊行は2回あったとされる．初刊本は1724年（享保9年）京都書林によって刊行され，76年後の1799年（寛政11年）重刻本が大坂書林によって出された．初刊本は源原通が校正し，『訂正東医宝鑑』[36]という名前だった．

このような背景には吉宗の本草学に対する情熱があった．吉宗は紀州の家

31）江戸前期の儒医．京都生まれで，父は野間玄琢．1640年に幕府の奥医師にまでなった．父玄琢の遺稿を増訂編纂した『群方類稿』（全63巻）等多くの医書，文集等を遺している．
32）出版者や出版地は未詳で，写本である．
33）筆談唱和集百数十冊の内，医学関連で確認されているのは43種といわれている．
34）三木栄『増修版朝鮮医書誌』（学術図書刊行会［1973］）．
35）『東医宝鑑』は2009年7月ユネスコの世界記録文化遺産に登録され，医書としては世界初である．
36）刊記には「享保九年甲辰仲夏刻成」と書いてある．

臣の家で育ち，小さい頃から山の草や樹木に強い興味を持っていた．これが吉宗の本草学や医学に情熱を燃やすきっかけになる．東医宝鑑は吉宗の耳にも入り，この書を求めた．吉宗の下に東医宝鑑が届いたのは 1718 年 1 月対馬藩からの献上からである．吉宗はさっそく薬の「湯液篇」を開いたがハングル[37]の壁にぶつかってしまった．吉宗は林良喜に指示し，日本にあるものとないもの等和名分類をさせた．林良喜が 1721 年 12 月 27 歳で亡くなったため，それを引き継ぎ丹羽正伯が『湯液類和名上下』『東医宝鑑湯液類和名上下』として完成させた．これと合わせて行ったのが朝鮮にある薬材の調査[38]であった．この調査は対馬藩の江戸家老平田隼人に指示し，釜山にある倭館を通して名称や産出状況等を 40 年以上もかけた前代未聞の調査であった．この成果は丹羽正伯によって『庶物類纂』[39]に取り入れられた．

吉宗のもう 1 つの関心は朝鮮人参であった．江戸の医者が朝鮮通信使からの関心が良医，医書，朝鮮人参であるのと同じである．とくに吉宗は朝鮮人参の国産化に力を注いだ．そのため江戸の奥医者だけでなく，全国から優秀な医者や本草学者を集め，丹羽正伯，阿部将翁，植村左平次，野呂元丈等が朝鮮人参の国産化に貢献した．吉宗が朝鮮人参の国産化を考えたのは，朝鮮人参の貿易により大量の銀が朝鮮に流れるのを恐れたからという説もあるが，日本の一般民衆の朝鮮医学に対する期待がいかに高かったのかが分かる．

五代将軍綱吉の時から朝鮮人参の人気は高まり，対馬藩の江戸直営店[40]の前には早朝から行列ができ，朝鮮人参の値段は高騰した．1700 年には朝鮮人参の小売価格が 600 グラム当たり銀 1 貫 440 匁まで上がり社会問題にもなった．朝鮮人参のブームは伝統医学が定着していた大坂，京都よりも新しいものを好む江戸で起きた．吉宗は朝鮮人参の国産化を念頭に入れ密かに側近に調査を命じた．当時朝鮮は自然産の山の朝鮮人参（山参）に頼っていた．釜山の倭館を通して朝鮮人参生根 3 本を入手し，1729 年（享保 14 年）日光の大出伝左衛門に栽培させた．これが成功し，人工栽培の方法は朝鮮にも伝わる．幕府では朝鮮人参の栽培方法を公開すると共に，各藩に朝鮮人参の種子

37）　ハングル文字は日本ではまだなじみ薄く，大学頭林鳳岡に聞いても分からなかったという．

38）　対馬藩宗家文書「薬材質正紀事」に詳しく見られる．

39）『庶物類纂』は稲生若水が編纂を始めたが 9 属 362 巻の記述で死去したため，吉宗の命により丹羽正伯らが 1745 年から 1747 年にかけ完成した．

40）　朝鮮人参の貿易は対馬藩が独占し，その 70-80％が江戸の直営店で販売されていた．

を分け与え栽培を奨励した．各藩にとっても朝鮮人参の栽培は財源[41]として期待された．

当時日本の医学水準はまだ初歩的な段階にあった．朝鮮の先進的な医学を導入するため朝鮮通信使一行に 1682 年第 7 回目から良医を正式に要請する．実は 1655 年第 6 回目にも良医という名前ではないが前回の 2 人の医員から，3 人（韓亨國，崔梱，李繼勳）になっていた．良医として正式に初めて参加するのは 1682 年第 7 回目の鄭斗俊（医員は李秀蕃と周伯の 2 人）である．この時の筆談唱和集としては『桑韓筆語唱和集』『和韓唱酬集』[42]が伝わる．『和韓唱酬集』の「東里筆語」は本草学に関する内容が含まれ，最初の医事問答集と考えられる．しかし，医事問答が本格的になるのは，1711 年第 8 回目以降である．医事問答はすでに朝鮮医学を書籍によって接していた日本の医者が直接朝鮮の医者に会って意見を求める形式であった．ここでは良医との医事問答を中心に考察する．

(1)　1711 年第 8 回目通信使

良医との医事問答が本格的になるのは 1711 年第 8 回目の通信使からであるが，この時の記録は表 2 の金顯門の『東槎録』がある．この時の正使は「江関筆談」で有名な趙泰億，副使は任守幹，従事官は李邦彦，良医は奇斗文で，金顯門は訳官として参加した．『東槎録』は訳官が書いた最初の使行録である．1711 年 5 月 15 日漢陽を出発し，6 月 6 日釜山，6 月 19 日対馬，9 月 15-25 日大坂，江戸に着いたのはその年の 10 月 19 日であった[43]．医事問答の内容が入っている筆談唱和集は 3 件出版されている．出版年度順では 1711 年『鶏林唱和集』，1712 年『両東唱和後録』，1713 年『桑漢医談』である．『鶏林唱和集』は良医奇斗文と竹田定直（春庵）[44]が藍島で行った唱和をまとめ，京都京師書坊の松栢堂と奎文館で出された．『両東唱和後録』は良医奇斗文と村上渓南との医事問答を中心に書かれた．場所は往路の京都であった．村上渓南は針灸を業とする家柄で生まれ，こ

41)　朝鮮人参の貿易を独占していた対馬藩は朝鮮人参の国産化によって財政に大打撃を受けることになる．
42)　『和韓唱酬集』は良医鄭斗俊と柳震沢との筆談集．
43)　江戸滞在は 10 月 19 日から 11 月 19 日までの約 1ヵ月間．
44)　竹田春庵は貝原益軒に従学した儒学者．

の医事問答は針灸が話題の中心となった．奇斗文は前もって準備した鍼術の専門書『医学入門』と『神應興』を見せながら説明した．村上渓南は別穴について関心を示し，筆写した．当時朝鮮での針灸は湯液と同じ位重要視されていた．日本にも影響を及ぼし許任の『鍼灸経験方』は 1725 年，1778 年の 2 回も日本で刊行された．『両東唱和後録』の出版は京都ではなく大坂の浪速書林村上清三郎，植田伊兵衛によって出された．『桑漢医談』は良医奇斗文と北尾春圃との医学に関する筆談唱和集である．奇斗文が復路の大垣に着いたのは 1711 年 12 月 1 日だった．この筆談唱和は 12 月 1 日夜から 3 日間にわたって宿舎の全昌寺で行われた．この時春竹，春倫，道仙の北尾春圃の 3 人の息子も同席した．『桑漢医談』は医学専門の最初の筆談唱和集で，北尾春倫が序文，本論，跋文，付録にまとめたのを京都皇都書肆万屋喜兵衛によって出版された．春圃は自著『医論六条』を持って臨み，朝鮮人参の質問から始まる．春圃は朝鮮人参の代用として沙参の効能を聞き[45]，奇斗文は沙参に黄芪，附子を加えても効果は期待できないと答えている．また 30 歳男性の難病（耳聲）について聞いている．この『桑漢医談』は日本の医者に刺激を与え，医事問答を盛り上げるきっかけになる．春圃用意周到な計画の下で行われ，3 人の息子を同席させ，以降 3 代にわたり交流を行うことになる．2 番目の息子北尾春倫は 1719 年第 9 回目の使行の時日本側医師の主役になり，北尾春倫の息子孟哲は 1764 年第 11 回目の時筆談唱和に参加している．

他に良医奇斗文に対しての稲生若水，片岡重治らの質問と問答がある．

⑵　1719 年第 9 回目通信使

第 9 回目の時の記録は表 2 の申維漢の『海遊錄』に詳しく書いてある．正使は洪至中，副使は黄璿，従事官は李明彦，良医は権道で申維漢は製述官として参加した．1719 年 4 月 11 日漢陽を出発し，8 月 1 日藍島，9 月 4-6 日大坂，9 月 27 日に江戸に着いた．この時医事問答が行われた場所は，藍島（8 月 1 日），大坂（9 月 4-6 日），江戸[46]の西本願寺（9 月 29 日），大垣（10 月 26 日，復路），彦根（10 月 27 日，復路），大坂（11 月 6 日，8

45）　春圃は沙参を持ってきて，奇斗文はそれを噛んで味をみている．“是時以唐沙参示之　斗文能噛　而味之”と記してる．

46）　江戸の滞在は 9 月 21 日から 10 月 14 日まで．

日，復路），牛窓（11 月 17 日，復路），上関（11 月 28 日，復路）で，漢陽に戻ったのは翌年 1720 年 1 月 24 日だった．この時の医事問答は江戸を始め各地で行われ，多くの出版物を遺している．『海遊録』[47]の著者申維漢も北尾春圃の 5 人の息子と唱和したと書いてある．申維漢は「医学は日本で最も崇高するものである」と医学の関心の高さに驚嘆している．

良医権道と小野士厚の間に行われた問答の『藍島鼓吹』，江戸の西本願寺で行われた村上渓南，周南，杏仙との間の『韓客贈答集』が出版されている．また，大坂の川内屋宇兵衛，嶝口太兵衛で出された『桑韓唱酬集 3 巻』と京都の奎文館で出された『桑韓唱和塤篪集 11 巻』は良医権道が病だったため医員として参加した白興銓が主導したと考えられる．『桑韓唱和塤篪集全 11 巻』では 50 歳男性の痔痛など 4 件，『桑韓唱酬集全 3 巻』では 5 歳の男の子の脚気に関する医事問答があった．前回にも朝鮮人参に関する質問は，飯田玄機が事前に形態や産地等を細かく調べもっと具体的な情報を求め，良医権道が答えている．

⑶　1748 年第 10 回目通信使

1748 年第 10 回目通信使録としては曺命采の『奉使日本時見聞録』，洪景海の『随槎日録』，南泰耆の『槎上部』などがある．以上の記録では，1748 年 2 月 12 日釜山を出発し，4 月 2 日藍島，4 月 17 日牛窓，4 月 21-30 日大坂，5 月 2 日京都，5 月 7 日名古屋，5 月 21 日に江戸に着き 6 月 12 日まで滞在する．この回は江戸で多くの医事問答が行われた．復路でも 6 月 28 日から 7 月 8 日まで大坂滞在の間医事問答が行われ，その年の閏月 7 月 12 日に釜山に帰る．正使は洪啓禧，副使は『槎上部』を書いた南泰耆，従事官は『奉使日本時見聞録』を書いた曺命采で，良医は趙崇寿だった．

良医趙崇寿と河村春恒との間で浅草本願寺にて行われた『桑韓医問答』（江戸東武肆須（寸）原茂下兵衛刊行），良医趙崇寿と百田安宅が大坂で行われた医事問答の『桑韓鏘鏗録』1, 2, 3 巻（京都圓屋清兵衛広文堂），良

47）　申維漢は“北尾春圃は号を当壮庵といい，その著『精気神論』数巻書が内容の出来が良さそうなので余はこれに序した”と『海遊録』に記している．これには訳があって良医権道に春圃の『精気神論』，春倫の『心下虚実論』の批評を依頼したが病気で応じられなく代わりに申維漢が序文を書いた．

医趙崇寿と丹羽貞機が江戸で行われた医事問答『両東筆語』1, 2, 3 巻（写本），の他に管道伯先生の『対麗筆語』（江戸書房出雲寺和泉椽），医員として参加した趙徳祚，金徳崙と野呂元丈，野呂元順が浅草本願寺で行った問答の『朝鮮筆談（元丈）』（写本）などが上げられる．この回で目を引くのが樋口淳叟の『韓客治驗』である．『韓客治驗』では他の例とは違い，日本人医者が朝鮮の負傷者を治療した経験や朝鮮通信使から質問された処方などを答えているのが特徴である．治療例としては朝鮮人 38 歳男性の火傷の治療を含め 14 例が上がっている．このような例は『朝鮮筆談』では良医趙崇寿の腰痛，『朝鮮人筆談』では 26 歳朝鮮人男性の肥満などの例が見られる．

この時も薬草に関する問答が多く『朝鮮人筆談』では本草学者野呂實夫の質問に良医趙崇寿は自分が知っているのは医学であって薬草ではないと答えている．また，朝鮮の医師の基本書は『黄帝内経』と説明している．

⑷　1764 年第 11 回目通信使

1764 年第 11 回目の通信使は医事問答の最終回になる．正使[48]は表 2 の『海槎日記』を書いた趙曮，副使は李仁培，従事官は金相翊，良医は李佐国であった．1763 年 8 月 2 日漢陽を出発し，8 月 22 日釜山，12 月 3 日藍島，12 月 27 日下関，上関には年が変わって 1764 年 1 月 3 日に着いた．1 月 20-24 日大坂，1 月 28 日京都，2 月 3 日名古屋，江戸には 2 月 17 日に[49]着いた．復路でも 4 月 5 日から 5 月 7 日の大坂滞在中医事問答を行い，漢陽に戻ったのは 7 月 8 日だった．

2 月 3 日名古屋[50]で行われた『和韓医話』（良医李佐国と山口忠居），浅草本願寺で行われた良医李佐国と松本興長との『両東闘語乾』，山田正珍との『桑韓筆語』[51]，横田準大との『両東闘語坤』，坂上善之との『倭韓医談』などがある．他に復路で，大坂の本願寺で行われた北山晶と製述官南玉の『雞壇嚶鳴』（写本）がある．この回の特徴は良医李佐国に人相に関する質問が多く，浪速の観相家新山退甫はこの筆談をもとに『韓客人相筆

48）　1811 年第 12 回目の使行には良医朴景郁がいたが，対馬では医事問答が行われなかったため第 11 回目が最終回になった．

49）　江戸滞在は 2 月 17 日から 3 月 10 日まで．

50）　山口忠居が性高院に良医李佐国を訪ねてきて行われた．

51）「江戸西村源六」刊行．

話』を出版する．この回も虎肉，厚朴，天仙子の効能など薬に関する多くの質問があった．『雞壇嚶鳴』では死体を解剖したときの記述がある．

4　おわりに

朝鮮通信使は文禄・慶長の役により中断された日本と朝鮮との国交を回復するのが目的だったのが，第4回目以降はその役割が文化使節に大きく変わり，さまざまな文化交流が行われることになる．その中心はいうまでもなく医学交流であった．日本は医学交流をもっと具体的にするため朝鮮通信使行に良医を必ず入れるように求め，1711年第8回目から招待した．良医は日本の医者と医事問答を行い，纏められ出版された本は現在確認されたものだけでも43巻に上る．医事問答は滞在期間などの都合もあり，浅草本願寺が一番多かったが，尾張の性高院，大坂の西本願寺，京都，大垣，彦根，牛窓，上関，藍島など多くの地方においても行われている．出版地は，京都，江戸，大坂，尾張で出版活動が盛んな地域であった．日韓医学交流の歴史は非常に古く，414年に新羅から金波鎮（日本では「久須利師」と呼び，薬の語源ともいわれている．）を派遣したのが最初の記録とされている．それ以降数多くの交流のなかで朝鮮通信使の医事問答による医学交流は両国の医学発展に貢献した日韓交流の象徴として考えられる．

参考文献

上田正昭・辛基秀・仲尾宏［2001］，『朝鮮通信使とその時代』明石書店．
倉知克直［2001］，『近世日本人は朝鮮をどうみていたか』角川書店．
辛基秀［1999］，『わが町に来た朝鮮通信使Ⅰ』明石書店．
田代和生［1999］，『江戸時代朝鮮薬材調査の研究』慶応義塾大学出版会．
高橋晴子［2001］，『朝鮮通信使の饗応』明石書店．
中尾宏［1993］，『朝鮮通信使に奇跡――増補・前近代の日本と朝鮮』明石書店．
中尾宏［2007］，『朝鮮通信使――江戸日本の誠心外交』岩波新書．
李進熙［1986］，『李朝の通信使――江戸時代の日本と朝鮮』講談社．
李進熙［1992］，『江戸時代の朝鮮通信使』講談社．